

## 実践報告

# 専門職大学院における「ディベート的討議演習」(その4) —— パネルディスカッションの教育的有効性とその実際 ——

花田 修一<sup>1</sup>

本稿は、平成18年度から平成22年度の5年間にわたる本学の「ディベート的討議演習」(通年・平成22年度のみ半期)の授業内容を中心に記述したものである。本授業では、次のような演習を行ってきた。①インナースピーチ、②ペアトーク、③グループディスカッション、④ロールプレイング、⑤ディベート、⑥パネルディスカッション、⑦シンポジウムである。

本稿では、⑥パネルディスカッションの実践を中心に報告する。なお、①インナースピーチと②ペアトークについては『教育総合研究』第1号(2008年)で、④ロールプレイングについては第2号(2009年)で、⑤ディベートについては第3号(2010年)で報告したので、参照いただきたい。

パネルディスカッション(panel discussion)は、一般に「集団討議法」の一方法として学会やセミナーなどで取り入れられている。教育界においては、1990年代に入って、国語科や道徳や学級(ホームルーム)活動などで少しずつ実践されるようになってきた。例えば、『中学校の表現指導 聞き手話し手を育てる』(東京都中学校青年国語研究会編・1994年)などである。それはこの20年来、学校教育に強く求められている論理的思考力や論理的表現力、情報や資料の活用力や多様な価値観の認識力などの育成に寄与できるという教育的効果が認められるからである。

以下、そのパネルディスカッションの授業について、授業資料や学生の発表などを基にして実践報告をしつつ、その教育的有効性を一層明らかにし、教師育成のための専門職大学院教育における「ディベート的討議演習」の実践的研究開発の一助としたい。

**キーワード：** 討論、言語活動、論理的思考力、論理的表現力、情報活用力、多様な価値観

## I 本授業の概要

### 1 本授業の目的

本授業は、本学を修了後、中学校及び高等学校の教師を目指す学生を対象として開講したものである。授業では、優れた教師になるための「ディベート的討議法」の基本的・応用的な実践的活用能力を一層高め、自らの人間的素養や資質をさらに高めること。また、多様な討議法の歴史や理論

<sup>1</sup> 日本教育大学院大学 学校教育研究科

や実践に学び、これからの中学生及び高校生に対して、様々な問題を発見し、解決できる力を身につけさせることができる指導力や授業力を高めることを目的としたものである。

## 2 本授業の方法と計画

前期は、前述した様々な「ディベート的討議法」の理論的・歴史的・実践的経緯を受講者各自が分担して調べ、考察し、報告することを中心とした。その報告に対して、受講者同士で質疑応答や討議を繰り返し、必要に応じて授業担当の筆者が助言・指導を行うという方法をとった。後期は、前期で学んだ内容を全員が「模擬授業」という形態を通して発表した。それに対して、受講者同士で相互評価をし、討議を重ねるという実践的教育方法の開発を行った。なお、平成22年度は前期のみの授業であり、通年の内容を前半と後半に分けて行った。

## 3 本授業の評価

本授業における評価は、出席率(30パーセント・講義ノートへの記入と毎時間の評価反省の記述)、レポート(20パーセント・夏季休暇中の学習指導計画書)、模擬授業と討議への参加(30パーセント)、定期試験(約20パーセント・前期及び後期の筆記試験)などを総合的に判断して評価した。また、この成績評価については、最初の授業で学生に明示した。

なお、「ディベート的討議法」に関する受講者の経験とその内容や学校における「ディベート的討議法」の教育的意義については、「教育総合研究」第1号(2008年)の拙稿PP.50-51を参照いただきたい。本稿では、受講者の感想の一部を紹介する。

## II 「パネルディスカッション」の教育的有効性とその実際

### 1 「パネルディスカッション」の教育的有効性

「パネルディスカッション」がなぜ、学校教育にとって必要なのか。それは、ある論題(テーマ)に対して、それぞれの立場に分かれて討論をすることにより、論題に対する自己及び他者の認識を深めたり、広げたりすることができるという教育的有効性が認められるからにほかならない。中学生や高校生は、その精神的発達から自己の考えや認識が偏見や独断に陥りやすいという傾向がある。それはまた、その時期における彼らの特徴でもある。様々な論題に対して、それぞれの立場や視点などがあることを、パネルディスカッションという意義ある言語活動を通して、論理的思考力や表現力、情報活用能力、多様な価値に対する認識の深化や拡充、目的や場面に応じた適切な表現法をも学ばせることが可能であると考えられるものである。

## 2 「パネルディスカッション」の授業の実際

### (1) 「パネルディスカッション」の定義や用語の確認

パネルディスカッションは、ある論題(テーマ)に対して、意見や立場が違う3名以上のパネリスト(panelist)が聴衆(floor)を交えて自由に討論をする形式であり、公開討論会の一つであると定義した。その際、ディベートやシンポジウムなどの討論との共通点と相違点などを明らかにした。

次に、パネルディスカッションで使う用語について確認した。

- ① コーディネーター(coordinator) — 司会・進行役で、パネリストやフロアーからの発言や内容を整理しながら討論が円滑に進行できるようにする。
- ② タイムキーパー(timekeeper) — 計時係で、司会役と協力して討論を決められた時間に合わせて討論が円滑に進行できるようにする。
- ③ パネリスト(panelist) — 討論に参加する代表発言者で、論題に対する自分の考えや立場を分かりやすく発言する。パネラー(paneler)ともいう。
- ④ フロアー(floor) — 会場に参加している聴衆者で、司会者の許可を得て質問や意見を述べることができる。

### (2) 「パネルディスカッション」の方法や手順の確認

パネルディスカッションの方法や手順を次のように確認した。

- ① まず、コーディネーターが今日の論題について簡潔に説明する。
- ② 論題に対するそれぞれの考えや意見を各パネリストが発表する。
- ③ 意見発表に対する質疑応答及び討論をパネリスト同士で行う。
- ④ 意見発表に対する質疑応答及び討論をパネリスト及びフロアーも交えて行う。
- ⑤ 最終の考えや意見をパネリストが発表する。

上記の方法は、パネルディスカッションの基本的な手順である。中学校や高等学校の実際の授業では、各グループの代表者がパネリストとして参加することが多いことを筆者から説明した。本授業では、受講者の誰もがパネリストになれるという方法をとった。

### (3) 「パネルディスカッション」の授業の展開とその実際

以下に示すのは、受講者全員(12名)が、実際に模擬授業として演習をしたものの一部を整理したものである。

#### ① 論題：教師に最も必要な資質や能力は何か

本学の学生は、将来中学校か高等学校の教師を目指している。したがって、この論題は、パネルディスカッションの模擬授業に対する受講者のモチベーションを高めるのに格好の論題であると考え、筆者が選定したものである。

#### ② 模擬授業の展開(全90分)

- 1 意見の構成や内容の確認(約20分)・・・前時に決めた論題「教師に最も必要な資質や能力は何か」に対するそれぞれの立場の意見の構成や内容をまとめる。

- 2 準備（約 10 分）・・・コーディネーター・タイムキーパー・パネリストなどの役割分担を話し合っで決める。
- 3 パネルディスカッション（正味 50 分）・・・コーディネーターとタイムキーパーの進行に従って、次の手順で行う。
  - (1) コーディネーターによる論題と時間配分の確認（5 分）
  - (2) 各パネリストによる意見の発表（15 分）
  - (3) パネリスト同士による質疑応答と意見交換（10 分）
  - (4) フロアを交えた質疑応答と意見交換（10 分）
  - (5) 各パネリストによる最終意見の発表（10 分）
  - (6) パネルディスカッションの評価と反省及び講評を行う。（10 分）

### ③ パネルディスカッションの実際

以下のパネルディスカッションは、平成 22 年 1 月 21 日（木）に、「教師に最も必要な資質や能力は何か」という論題で行った授業の実際である。

H（司会）：今回の論題（テーマ）は、「教師に最も必要な資質や能力は何か」です。最初に、パネリストの紹介をします。右からWさん、Sさん、Mさん、Iさん、Aさんの 5 人です。今日のパネルディスカッションの流れを説明します。まず、パネリストのみなさんから 3 分以内で意見を発表してもらいます。1 分前にはベルを鳴らします。次に、パネリスト同士の討議を 10 分、全体討議を 10 分、最後にパネリストのまとめをそれぞれ 2 分以内でお願いします。

では、まず論題に対するパネリストからの発表をお願いします。Wさん、どうぞ。

W：私の考えは、「強い精神力」です。その理由を六つ言います。一つは、いろいろな困難にぶつかったときに負けないためです。二つは、生徒指導をするときに生徒になめられないためです。三つは、心身の安静を保つことで安定した授業を行うためです。四つは、辛いことを言われても耐えられるためです。五つは、指導の際に情に流されないためです。最後の六つは、生徒の努力に対して大きな懐を持ってどんと構えられるためです。

H：それでは、Sさんの「教科力」についてお願いします。

S：教師に「教科力」がないのは、致命的です。生徒の質問にすぐ答えられずに延ばしてしまうと、生徒自身も質問をしたことがどうでもよくなってしまいます。そもそもすべての土台は教科力にあります。教師が知っていること、できることが生徒の学習意欲にもつながるのです。

H：では、次にMさん、「生徒の立場に立つ」について考えを述べてください。

M：はい。まず、「生徒の立場に立つ」というのは、常というわけではありません。状況に応じてということなのです。生徒と一緒にふざけるわけではありません。生徒の立場に立つという理由は、三つあります。一つは、生徒の興味・関心を知ること。二つは、教師である自分自身を客観的に見ることで、教育の向上を図ること。三つは、相手を尊重する人間を育てるためには、まず教師自身が生徒を尊重しなければならないと思うこと。教師

という立場を続けているうちに「尊重する」ということを忘れてしまうかもしれません。生徒の立場になることで、相手の気持ちを大切にすることを忘れないためです。

H：では、Iさんどうぞ。

I：まず、人を「みる」は「見る」ではなく、心を「観る」、観察の「観」です。教師とは、①監督であり、②リーダーであり、③コーチであると思います。監督は学級でのいじめや自己を防ぐ役割を持ち、リーダーは学級のポジションを見極め率いていく役割を持っています。コーチはテクニック、教育技術の面です。一人ひとりの状況を観て個別に教える役割を持っています。そのためには、生徒の心を「観る」ことが大切だと思います。

H：では、「意欲」について、Aさんお願いします。

A：はい、「意欲」は自分の希望を実現するために必要な資質であり能力です。いくら知識を持っていても教える意欲がないと教えられません。だから「意欲」なのです。

H：では、これからパネリスト同士の質疑応答や討論に入ります。誰に対して、どのような質問や意見なのか要点をまとめてお願いします。また、フロアーの方も後で討論に参加してもらうので質問や意見をよく聞いていてください。では、パネリストの方、どなたからでもどうぞ。

I：はい。(挙手をする)

H：Iさんどうぞ。

I：Wさんに質問です。「精神力」では、枠が大きすぎると思うのですが。例えば、「忍耐」とか「勇気」とか……。その中で最も重要なのは何だと考えていますか。

H：Wさん、どうですか。

W：「気合」だと思います。

H：Iさん、どうですか。

I：ありがとうございます。

M：はい。(挙手)

H：Mさん、どうぞ。

M：Sさんに質問です。学校教育には学力以外の面もありますが、「教科力」だけだとその面が見えてこないのではありませんか。

H：Sさん、どうですか。

S：学力、教科力以外にも広い知識や理解力がないといけないと思います。そのためにも、基礎としての教科力が必要だと考えます。

H：Mさん、どうですか。

M：ありがとうございます。

H：Aさん、「人を観る目」について質問はありますか。

A：(無言)

H：じゃあ後でということで、考えておいてもらいましょう。

W：はい。（挙手）

H：Wさん、どうぞ。

W：Mさんに質問です。生徒の立場に立つことを忘れない、ということぐらいではいけませんか。

H：Mさん、どうですか。

M：はい。忘れないということと同じ意味です。

W：生徒の立場に立つということは、教師の資質ですか。

M：どう説明するか、どういう指導がよいのかを考えることなので、能力ではなく資質だと考えます。

W：ありがとうございます。

S：はい。

H：Sさん、どうぞ。

S：Wさんに質問です。「精神力」は、ホームルームや授業ではどう活かされるのでしょうか。

H：Wさんどうですか。

W：生徒が騒がしいときに怒鳴るといのは、教師が気合いを入れないとできません。また、生徒からの強い批判に対して強い姿勢を見せることも「精神力」が必要となります。

S：ありがとうございます。

A：はい。（挙手）

H：Aさん、どうぞ。

A：「観る」の意味を調べたら「人を見た印象」とあります。Iさん、「印象」でいいのですか。

I：例えば、ちょっと叱るのか、高圧的に叱るのか、生徒によって感じることで、効果が違ってきます。よく生徒を観て相手に合うものを選ぶために「観ること」が大切なのです。

A：ありがとうございます。

H：他の方はいかがですか。（挙手なし）では、私からみなさんに質問します。それぞれの資質や能力を教師になる前に育てておくために、今どのような心構えで生活をすればいいと思いますか。Wさんから順番にお願いします。

W：特にありません。これまでの生活環境によります。

S：教科書だけに限らず、いろいろ、例えば、博物館などに行って見識を広げたりすることです。

M：普段から、友人などに対して相手の立場になって考える習慣をつけることです。

I：音楽や絵画などに触れ、作曲家や作詞者や制作者などがどのような思いでその作品を創ったかを考えながら生活することです。

A：本気で教師になりたいという思いを持ち続けることで「意欲」が高まります。

H：ありがとうございます。ここからフロアーも参加になります。質問に対する批判は、NGです。誰に対していくつあるかも明確にお願いします。時間は、全体として10分です。

Y：はい。（挙手）

H：Yさん、どうぞ。

- Y : Mさんに質問です。日ごろから「人の立場に立つ」と言いましたが、具体的にはどのような場面でしょうか。
- M : 先輩として後輩を指導するとき、また店員として客に接するとき、相手の立場で考えることが大切だと考えます。友達の間では、「こんな話し方をすれば分かってくれる」「こう言うと傷つくかもしれない」ということを考えて話すということです。
- Y : ありがとうございます。
- N : はい。(挙手)
- H : Nさん、どうぞ。
- N : パネリストのみなさん全員に尋ねます。他のパネリストの意見を聞いて、自分の考えより必要な意見だと思うものがありますか。
- H : では、Wさんから順にどうぞ。
- W : ありません。
- S : 最も必要というのはありません。
- M : Aさんのものもよいと思います。私の意見と同じ第一です。
- I : 自分は自分の意見が一番だと思います。
- A : 私は、全部大切だと思います。
- N : ありがとうございます。
- F : はい。(挙手)
- H : Fさん、どうぞ。
- F : Wさんに質問です。先ほど、現在の生活では心がまえは特にはないと答えられましたが、この2年間の大学院生活で、教師となるための「精神の鍛え方」があると思うのですが、いかがですか。
- W : あると思うのですが、具体的にどうすればよいのかは分かりません。ここ(本学)に入学して、普段の授業や友達との会話や図書館での読書などで鍛えていくことができると考えています。
- F : ありがとうございます。
- H : Kさんは何かありますか。
- K : あえて挙げるなら、SさんとMさんに尋ねたいことがあります。まず、Sさん、「教科力」は大切だと世間は見ていますが、生徒は認めないのではないかと思います。いかがですか。
- S : 先生のことが信じられるか、ということですね。生徒は、先生が質問にぼんぼんと答えられれば、初めは「何だこいつ」と思っている、見方がよくなっていくと思うのです。
- K : ありがとうございます。では、Mさん。生徒の立場まで教師が心移してしまつては、教師と生徒の立場がなあなあになってしまいませんか。
- M : 常に、というわけではありません。何かの計画や何かを判断するときに、生徒がどう感じる

かを考えるためです。立場が違うからこそ、相手の立場を思うことが大切だと考えます。とても難しいこととは思いますが。

K：ありがとうございます。

H：パネリストのみなさん、フロアーのみなさん、他にありませんか。（挙手）Iさん、どうぞ。

I：Sさんに質問です。生徒から質問が出ないときはどうやって信頼を築いていきますか。

S：その場合は、生徒を刺激します。例えば、「あなたならこの問題についてどのように解決しますか」「あなたならこの場合どのような態度をとりますか」など、生徒の思考をつついて考えざるを得ない状況を作り出します。

I：ありがとうございます。

H：では、これからパネリストのみなさんに最終意見の発表をお願いします。今度は、Aさんから順をお願いします。どうぞ。

A：やっぱり「意欲」を持って成長し続けることです。

I：私は剣道をやっています。剣道では、最も大切なことは「観ること」です。相手への思いやりを持つことという面では、教育にも剣道にもつながりがあると考えます。

M：生徒に対する教師の影響は大きいものです。教師には、教師の負う責任があります。それは、「生徒の立場に立つ」ことによって芽生えてくるものだと思います。

S：他の資質や能力がなくていいというわけではありません。それぞれが大切であります。やはりその根本には「教科力」がなければならないと思います。専門教科の知識や技能がなければ、教師の資質や能力も活かすことはできません。

W：最終的には、やはり強い「精神力」だと思います。この基本となる精神力があつてこそ他のこともうまくいくのだと思います。

H：これで、最終発表を終わりにします。パネリストのみなさんに拍手をお願いします。（拍手）司会者としての感想を述べます。いろいろな意見が出ましたが、私は、どれもが大切で、必要な「教師の資質と能力」であると考えました。どれか一つ欠けても教師としては未熟だと思うからです。パネリストの方もフロアーの方も、お互いに何かに共感をしたり、理解をしたりしてもらえればそれでいいと思います。それでは、「教師に最も必要な資質や能力は何か」という論題による今日のパネルディスカッションを終わりにします。（全員拍手）

### 3 「パネルディスカッション」授業の評価とその考察

以上、「パネルディスカッション」の授業を通して、その「定義」や「教育的意義」や「授業の展開法とその実際」などを中心に論述してきた。ここで、「パネルディスカッション」の授業を振り返り、その反省と評価をふまえて考察をしておきたい。

本稿で紹介したのは、「教師に最も必要な資質や能力は何か」という論題での「パネルディスカッション」の模擬授業の実際であった。この模擬授業の最後に、筆者は、受講者に対して次のようにコメントした。そのキーワードを三点紹介したい。



- (1) パネルディスカッションの論題に対しては、多様な見方や考え方があることを生徒達に体験的に認識させること。
- (2) パネルディスカッションの授業を通して、みんなで学び合うことや高め合うことが学校における学びのよさであることを体験的に実感させること。
- (3) パネルディスカッションという言語活動は、思考力や表現力や認識力などを身につけることができる価値ある討論の形式であることを体験的に理解させること。

また、次に示すのは、筆者が作成し、毎時間配布する「相互評価表」の一部である。これは、上記の「教師に最も必要な資質や能力は何か」という論題でパネルディスカッションを行った際のものである。(実物は、A4判1枚)

平成21年度 第27講 「ディベート的討議演習」(通年)の授業レジュメ

授業者:花田 修一

2010年1月21日(木) VI限(18:10~19:40) セミナーC

### 第16回 模擬授業の相互評価表

第27講(2010.1.21) 授業者:花田 修一 評価者氏名 XXXXXXXXXX

主な言語活動(パネルディスカッション) 学習対象者(本授業の受講者)

評価の観点	評価(○で囲む)
1 指導のねらい(学習目標)が十分に達成されているか	Ⓐ B C D
2 指導の過程(学習の展開)が十分に工夫されているか	Ⓐ B C D
3 活動形態にふさわしい学習教材が選択されているか	Ⓐ B C D
4 学習者の言語活動は十分に確保されているか	A Ⓑ C D
5 授業者の発問・板書・助言・態度などは適切であるか	A Ⓑ C D

\* 授業者へのコメント

(よかった点や改善すべき点を具体的に指摘して、相互に励まし合う。)

○ よかった点

今回のパネルディスカッションのテーマは教師を目指す人間にとって  
じっくりと見つめ直していかなければならないテーマであり、それについて  
他の学生の意見を聞いたことは貴重でした。花田先生がおっしゃっていたように、  
多様な考えを知ることの大切さを改めて感じました。ちなみに先生のこのテーマについての本当のご意見  
は何でしょうか? どれも大切ですが、本管のキーワードは「師魂」です。

○ 改善すべき点

できればもう一度、パネルディスカッションを実践できると  
もっと身に付くのかなと思いました。授業に取り入れて  
みたいですが、なかなか難しそうですね...

→ぜひ授業や道徳や学活、ホームルームでも取り入れて挑戦してください。

1/21

○ 評価者に対する授業者からのコメント

ご苦勞さまでした。今回の論題は近い将来  
教師になるあなたにとっても価値のあるもの  
だと思います。大いに活用してください。

授業者サイン



筆者は、この模擬授業の最後に「授業に対する教師の取り組み方」に対して受講者に次の三点を強調し、これからの期待を述べた。

- (1) 教師自身がわくわくどきどきしながら、快い緊張感を楽しむような授業を創出していきたい。
- (2) 生徒の実態を的確に把握しつつ、ワークシートや感想交流なども具体的に指示ができるような授業を創出していきたい。
- (3) 他者の批判を素直に受け入れて、よりよい授業を目指し改善を図っていくような授業を創出したい。

なお、この模擬授業におけるパネリスト以外の論題に対するキーワードは次のようであった。「プロ意識」「計画実行力」「生徒への愛情」「マネジメント力」「生徒の成長を喜べる心」「忍耐力」などである。筆者は、「心身の健康」を挙げた。

また、この模擬授業の一週間後に「論題に対する自分の考えとその理由」「他者の考えとの比較」「反論の予想」「本授業の感想・評価・総括」をレポートにまとめて提出させた。

次に、ある受講者のものを転載する。(実物は、A4判1枚)

- (1) 論題：教師に最も必要な資質や能力は何か
- (2) 私の主張：プロ意識
- (3) その理由
  - ① 専門職である。顧客満足に徹し、授業のクオリティを向上し続けなければならない。
  - ② 公務員である。学級、学校だけでなく、全体に奉仕しなければならない。
  - ③ 教育者である。信念をもち、哲学を語れなければならない。
- (4) 他者との比較
  - A：計画実行力⇒○。PDCサイクルであり、評価するチェック機能が欠けている。
  - B：生徒の立場に立つ姿勢⇒△。教師は保護者でもなく、ボランティアでもない。
  - C：愛情⇒△。感情論を第一にするのは危険である。
  - D：教科力⇒◎。専門職であり、当たり前のことこそが大事(不易)。
  - E：マネジメント力⇒○。外部(講習・研究会・セミナーなど)への参加が必要。
  - F：生徒の成長を喜ぶ心⇒△。相手に何かを望むのは危険である。
  - G：授業力⇒◎。専門職であり、当たり前のことこそが大事(不易)。
  - H：強い精神力⇒○。それを身に付ける方法(多くの人に出会う)。
  - I：人を観る目⇒○。アンテナを立てることであり、情報収集は大事。
  - J：忍耐力⇒○。それを身に付ける方法(失敗すること)。
  - K：意欲⇒◎。モチベーションがあつてこそ、効果的に実行できる。
- (5) 反論の予想
  - ① 抽象的な表現である。 ⇒ 教師とは、専門職・公務員・教育者を有しており、その三つ

の共通点と考えた答えである。論題が「資質」とあり、十分適当である。

- ② 生徒という存在が欠けている。⇒ 相手（生徒）を考える前に、自分（教師）との戦いを考えるべきである。

#### (6) 総括

インナースピーチからパネルディスカッションまで多くの対話型学習法を学んだ。

これらを今まで学んだことはなかったが、社会経験を通して、形を変え、日常的に行われており、経験してきたことでもあった。その必要性と危機感を痛感した一年間でした。よって、将来教壇に立ち、対話型学習を行う際は、日常性の実感、効果（目標）の意識化を明確にし、生徒が笑顔で主体的に学び合う場を作るように努める。

### III 本授業の成果と課題

以上、「専門職大学院における『ディベート的討議演習』（その4）ーパネルディスカッションの教育的有効性とその実際ー」について、実践報告を中心に論述してきた。最初の「要旨」でも述べたように、平成18年度から22年度の5年間に筆者が担当した「ディベート的討議演習」の授業から「パネルディスカッション」の内容に焦点化して報告した。

本授業全般に関する受講者の「授業から学んだこと」については、『教育総合研究』第1号（2008年度）のpp.61-62の拙稿を参照いただきたい。なお、平成18年度の受講者は11名、19年度は16名、20年度は11名、21年度は12名、22年度は12名であった。

本授業の成果を整理すると次のようなことが言える。

- ディベート的討議演習に対する受講者のモチベーションが高まったこと。
- パネルディスカッションの基礎的知識や基本的な技能を模擬授業で習得したこと。
- 道徳やホームルームや教科などで有効な活用法を開発したこと。

本授業で筆者が期待していた「論理的思考力の向上」「論理的表現力の習得と活用」「認識力の深化・拡充」「情報活用力」「多様な価値観の認識」なども、おおむね受講者の身についたと考えている。それは、次のような受講生の授業評価（平成22年1月21日・実施）からも伺うことができる。紙幅の都合で、敬体を常体に変えて、一部引用する。

- ディベートやパネルディスカッションという言葉や概念は知っていたが、具体的な手順などを経験できてよかった。教師になったときに役に立つ授業であった。また、他教科の学生と話す機会ができて参考になった。
- まず、授業方法の視野が広がった。この授業を受けるまでは、討論形式の授業及び生徒間交流の授業という視点が欠けていたように思う。本授業における授業方法の拡大は私にとって大きな収穫だった。また、ディベートやパネルディスカッションを実際に体験できたことも貴重であり、授業者自身の経験の有無は生徒に大きく影響する。

- 年間を通じて様々な言語活動に触れることができた。これまでは、ほとんど「受け身の授業」しか受けてこなかったこともあり、毎時間新鮮な気持ちであった。新たな手法を知り得ては生徒に試してみるという習慣ができた。Wさんとの連携はスムーズにいき、教員間のチームワークの重要性に触れることもできた。協調性は、教師としての能力であることを実感した。失敗を恐れずに積極的に授業に挑戦したい。
- この授業を受けて私は「授業力」を身につけたと感じている。様々な討議法の理論と実践を経て、それを授業にいかに生かすかを学び取った。特に、次の三点である。①生徒に飽きさせない授業を創ること。②生徒の主体性を育てること。③授業の構成を工夫すること。現場の教師になったら、ペアトークやロールプレイングやディベートやパネルディスカッションなどを授業で有効に活用し、生徒の興味・関心を引きつけて、楽しく力のつく授業を創っていきたい。
- 中学と高校は教科担任制なので、他教科の授業を参観する機会はほとんどない。しかし本授業は、様々な教科の学生が混在しているうえに模擬授業を行う科目だったので、他教科の授業に触れるよい機会であった。自分の専門教科以外から新たなヒントを得ることができて勉強になった。また、「対話型」の手法によるこの授業は、私にとって有意義であった。その必要性も実感できた。ペアトークやバズセッションやディベートやパネルディスカッションなどを体験できたことは大きな財産となった。教師にとってはどれも周到な準備が必要だが、将来は学校現場でぜひ挑戦してみたい。
- ディベート的討議演習は、これまで私が受けたことのない授業であった。この授業は、私がいまだ得意でない「自分の考えをまとめ、それを相手にわかりやすく、しかも説得力のある言葉にして話す」という力を伸ばすのに最適の内容であった。この授業で学んだことをさらに伸ばせるように努力を続けていきたい。
- この授業は学生が中心となるスタイルで、学生が行う模擬授業を経験できたことは貴重であった。授業の中にディベート的な討議をどう取り入れるかをいつも考えるようになった。また、模擬授業に対する教科の異なる学生からの批評や批判は自分自身では見つけられない問題点や反省点を浮き彫りにしてくれるので、学習指導案作りや実際の授業のためによい経験になった。相手に自分が伝えたいことを意図したとおりに伝える力がこの授業では求められた。苦手な私にはよい修業となった。
- 人見知りや激しく、人に話しかけることが苦手な私にとって、自分の意見を一方的に発表するのではなく、対話のキャッチボールが必要となるこの授業はとてためになった。授業であっても、まだ心を開けない人と討論すること自体が今までの私には考えられないことであった。苦手なことにも挑戦する気持ち、人と対話すること、人前で話すこと、また教師のなにげない一言が生徒を変えることなどを、この授業で学んだ。これらは、教師に必要な不可欠な資質であり能力であると教えていただいた。

今後は、さらに多様な領域（総合的な学習の時間や生徒会の委員会活動や部活動のミーティングなど）での模擬授業の展開や論題の発掘や情報の収集法とその効果的な活用や有効な方法の開発に取り組んでいきたい。それはまた、現在及び将来にわたって学校教育に求められている「言語力」育成のために、「言語活動」の具体的な実践的研究課題でもあると考えるからである。

#### ＜引用文献及び参考文献＞

- 池田 修 (2008) 『中等教育におけるディベートの研究』 大学図書出版
- 鈴木良治 (1994) 『高校生のための国語科ディベート授業』 明治図書
- 花田修一 (2010) 「専門職大学院におけるディベート的討議演習 (その3) —ディベートの教育的有効性とその実際—」 『教育総合研究 日本教育大学院大学紀要 第3号』 PP.95-118
- 花田修一 (2009) 「専門職大学院におけるディベート的討議演習 (その2) —ロールプレイングの教育的有効性とその実際—」 『教育総合研究 日本教育大学院大学紀要 第2号』 PP.97-111
- 花田修一 (2009) 「ディベート (debate) 教育」 日本教育大学院大学監修『教員免許更新講習テキスト—教育現場のための理論と実践』 昭和堂 PP.218—223
- 花田修一 (2008) 「根拠を明らかにして論理的に述べる力をつける—対人メソッド—教育ディベート技法」 日本教育大学院大学監修『教師のための「教育メソッド」入門』 教育評論社 PP.128-133
- 花田修一 (2008) 「専門職大学院におけるディベート的討議演習 (その1) —インナースピーチとペアトークの教育的有効性とその実際—」 『教育総合研究 日本教育大学院大学紀要 第1号』 PP.49-65
- 花田修一 (2009—2010) 「『活用型』学力をどう育てるか」 『教育科学国語教育』 (2009年4月号から2010年3月号までの12回にわたる連載稿) 明治図書
- 花田修一 (2010) 「『言語力の育成』なぜ強調されるのか—適切な言語運用力が人間力を育む」 『現代教育科学』 (3月号) 明治図書 PP.11-13
- 花田修一 (2010) 「『習得・活用・探求』学習—国語科学習の転換—実践的言語活用力を育てよう」 『現代教育科学』 (5月号) 明治図書 PP.59-62
- 花田修一 (1999) 『「伝え合う力」とは何か—ある国語教室からの発信—』 三省堂
- 花田修一 (1997) 『生きる力を育む「話し言葉」授業の改革』 明治図書
- 花田修一 (1994) 『国語科ディベート授業入門』 明治図書

---

Practice-based Report

## Seminar on Debate and Deliberation at a Professional School (No. 4):

Educational Effectiveness and the Practices of Panel Discussion

Hanada, Shuichi

---

This article describes some of the contents of a Seminar on Debate and Deliberation, taught for five years during the 2006-11 academic years. The Seminar deals with (1) inner speech, (2) pair talk, (3) group discussion, (4) role-play, (5) debate, (6) panel discussion, and (7) symposium. This article focuses on the section on panel discussion.

Panel discussion is generally used in academic conferences and seminars as one type of collective deliberation. In the education field, it started to be used gradually during the 1990s in Japanese classes, moral education classes, and homeroom activities. It is because panel discussion has been found, over the past 20 years, to make an educational contribution in developing logical thinking skills and logical expressions, abilities to utilize information, and skills to recognize diverse values.

This article documents how panel discussion was taught in this seminar. Based on the analysis of students' lecture notes and presentation handouts, this article aims to investigate the educational effectiveness of the methods used in the course and to contribute to the development of practice-based research on debate education at professional schools of education.

**Key words:** debate, language activities, logical thinking, logical expressions, abilities to utilize information, diverse values

---